

石井忠雄作 「光君の誕生日」

< 前編 >

コーチ よし、インターハイ目指して練習を始めるぞ。各自、自分の弱点に気をつけて練習する。いいな？

卓球部員 はい！

コーチ では、始め！

(効果音) (高校の体育館。卓球の練習風景)

女子 (岸尾と対戦練習しながら) ねえ、岸尾君。あなた、少し疲れているんじゃない？

岸尾光 うん。帰りが遅いからな。練習終わってから家に帰ると9時だけ。

女子 お互いに若いって、バテるよね。

光 おっと、マズった。

コーチ おい、岸尾！何やってる。なんでそんなミスをするんだ？

光 すみません。

コーチ “すみません”じゃないぞ。お前がたるんでるからだ。なんだ、その態度は！

(効果音) (平手打ち)

コーチ そんな調子だから、肝心な試合で負けるんだ。そんなんならやめてしまえ！

光モノローグ ああいてえ。イヤだなあ。おれはどうしてこうなんだろう。今年はインターハイに出る最後のチャンスだっていうのに。チキショー。でも、せっかくここまで頑張ったんだ。やめるものか。

光 先生、すみません。しっかりやります。やらせてください。

コーチ よーし。まじめにやれ！

光 はい！

(効果音) (卓球練習続く)

光ナレーション おれは岸尾光。国学院久我山高校3年生。卓球部に入っている。6月末にあるインターハイの予選を目指して頑張っていた。そして、その予選の当日がやってきた。

コーチ 岸尾。お前は、1、2年とも予選で失敗しているんだ。今年こそ頑張れよ。

光 はい、頑張ります。

(効果音) (試合風景。ラリーの応酬)

ナレーション でも、おれはすっかり固くなってしまって、今度もギリギリまで追い込まれてしまった。

審判員 トウェンティー、テン。サーブチェンジ。

光モノローグ 頑張るぞ。勝負は最後の一瞬まで分からない。おれのサーブを受けてみる！

審判員 ネットタッチ。

光 ヤベー。よし、今度は慎重に。

審判員 アウト。ゲームオーバー。

光モノローグ あー、ダメだ。これで終わりだ。おれは何をやってもダメだ。なんのために、なんのために3年も頑張ったんだ？ チキショー！

(効果音) (光、帰宅して家のドアを開ける。)

母 ああ、光？ お帰り。今日の試合はどうだったの？

光 ……。

母親 どうして返事をしないの？

光 うるせえなあ。あんたにや関係ねえだろ。

母 そんな言い方ってあるかい。人が心配しているのに。

光 そんなに心配してもらわなくてもいいよ。メシは？

母 今作ってるよ。

光 まだできてねえのかよ。口ではいろいろいうけどさ。本当はどう思ってるんだか。

母 それが親に向かっていう言葉かい？ お母さんは、お前のことを考えると心配で心配で…。

光 そんな泣き言、もう聞きたくねえよ。それより早くメシにしてくれよ。

(音楽) (ブリッジ)

ナレーション おれは、外ではとてもよい子で、卓球部のしごきにも耐えて頑張ってきた。しかしその分、家ではずいぶんとわがままで、両親、特に母親にはつらく当たっていた。何かイヤなことがあると、なんでも、“人が悪いからこうなった”と考えていたのだ。

(効果音) (テレビ実況中継)

光 おい、^{わたる}亘。ちょっとテレビのチャンネル変えてくれよ。

亘 お兄ちゃん、自分で見ているんだから自分で変えるよ。

光 おれの言うこと聞けねえのかよ。そばにいるから「変えてくれ」と言ってるんだろ。

亘 イヤだね。自分でやれよ。僕はテレビなんか見てないんだから。

光 何？ 生意気なこと言うな。この野郎！(殴りかかる)

亘 何すんだよう。

光 兄貴に逆らいやがって！

亘 兄ちゃんは自分のこともできないんかよう。

光 何?!

(効果音) (パシッと平手打ち)

亘 バカァ！ 兄ちゃんのバカァ！

母 やめなさい。二人とも、いつもケンカばかりして。兄弟でしょ。少しは仲良くしなさいよ。

亘 だって兄ちゃんが悪いんだもん。

光 そう言って、いつも人のせいにするなよな。

母 光、お前はお兄さんなんだから、少しは我慢しなさい。

光 いつもおればかり悪者にしやがって。いいよ、分かったよ。

(効果音) (「バタン」と強くドアを閉めて出ていく。)

ナレーション 心の中では自分が悪いと分かっているけど、自分の思ったとおりにならないと、無性に腹が立った。でもそのあとはなんとも言えず惨めで、今度こそ優しくと思いつつ、またカッとして 。そんな自分を、おれはほとほと扱いかねていた。

(効果音) (塾の教室のガヤ)

女子A ねえ岸尾君。この間の模試どうだった？

光 あの3科目の？ いやあ、恥ずかしくて言えないよ。

女子B そんなことないでしょ？ わたしは完ぺきに悪くてさ、志望校のランクを下げようと思ってんの。

光 何点だった？

女子A 聞かないで。180点台よ。

光 おれよりいいじゃんか。大学受験で大変だな。どこまでやりゃいいんだ？ みんな、どうやってんだろ。

女子B 光君は大変よね。今まで部活で時間を取られてたしね。

ナレーション 確かに、それまで部活でかなり時間を取られ、勉強に打ち込むことができなかった。しかし、やっと勉強に集中できるようになっても、あのすべてをかけた卓球から、何も得られなかったことのむなしさも手伝い、おれは次第に自信を失っていった。勉強に、というより、自分自身にだ。

そんなおれを励ましてくれたのは、その年の9月末に交換留学で来日し、2か月間、我が家でホームステイしたオーストラリアの女子高生、ダイアン・ジョンソンだった。彼女は、明るくて笑顔がものすごくきれいだった。それは、なんかうまく言えないけど、心の内側から出てくるようだった。彼女は音楽が好きで、いつもピアノを弾いたり、レコードを聴いていた。

ダイアン ヒカル、この歌、分かる？

ヒカル ビリー・ジョエルだろ？

ダイアン よく分かったね。

ヒカル おれ、大好きだもん。

ダイアン ヒカルも好きなの？ わたしも大好きよ。

ヒカル へー。初めて好きなものが一致したね。

ダイアン わたし、あなたのお父さんも、お母さんも、そしてあなたも好きよ。

光 え？ じょ、冗談きついよ。

ダイアン ジョーダン？ おー、ジョーク。ノーノー、これ、本当よ。

光 でもさ、おれ、家ではわがままだろ？ 本当は自分でも悪いと思うんだけど、ついつい両親に逆らって文句を言っちゃうんだ。

ダイアン そう。分かる。わたしもそうだった。

光 へえー、ダイアンも？ 信じられない。ねえ、どうしたらいい？

ダイアン そうね。それはあなたが相手の言うことをよく聞いて、自分のいいたいことを我慢することね。つまり、あなたが大人になるのよ。

光 大人にね。それができないから困んだよな。ダイアン、君はどうしたの？

ダイアン ヒカル。今のビリー・ジョエルの曲、知ってるでしょ？ うん、「グッドナイト・サイゴン」！ その中にジーザス・クライストっていう言葉出てくるでしょ？ なんのことが分かる？

ヒカル ジーザス... クライスト...。分かんない。なんのことが？

ダイアン これは人の名前です。日本語ではイエス・キリストね。この方は神様で、今、わたしの心の中に住んでいます。わたしは、このお方とお話だってできるのよ。

光 え、ウソ！

ナレーション その時、初めておれは、彼女がクリスチャンだということを知った。よく独りで聖書を読み、祈っている姿を見ると、何か頼るものを内に持っているようで、うらやましくなった。でも、彼女はクリスチャンホームで生まれたからクリスチャンになれたので、自分なんかはキリスト教とは全く関係のない家で育ったから、クリスチャンにはなれないのだと考えていた。でも、彼女と過ごした2か月間は、確実におれの心の中に、ある変化をもたらしていた。なんとなく心がウキウキし、物事を前向きに、積極的に考えられるようになったのが、自分でも不思議だった。

(音楽) (明るい感じ)

ナレーション だが、その2か月間は、あっという間に過ぎた。

光 え、もうオーストラリアに帰るの？

ダイアン ハイ。2か月間という約束でしょ？

光 そうかぁ。もう少し延ばせないかなぁ。

ダイアン わたしにも予定があります。それに約束ですから。

光 寂しくなるなぁ。ねえ、オーストラリアに行ってもいい？

ダイアン オー。どうぞ、来てください。

光 よし、大学に入ったら行く。絶対行くからね！

ナレーション ダイアンが帰った後は、心の中の灯が消えたようだった。僕は、寂しさと、受験に対する不安の中で、ダイアンに手紙を書いた。しかし、彼女からの返事は来なかった。そんな中で、おれは改めて自分自身を見つめた。なんて弱いんだろう。卓球で鍛えた忍耐力や、精神力は一体どうなったんだろう。外では“いい子”で

通してるのに、家の中ではわがまま放題に振る舞っている自分は、一体なんなんだろう？ “偽善者”　これは僕の一番嫌いな言葉だった。

光モノローグ　しかし、このおれが偽善者でなくてなんなんだ？　ああ、イヤだ　イヤだ。こんな自分は一体どうすればいいんだ？

ナレーション　そんな時、あのダイアンの言った言葉が、おれの心の中によみがえった。

ダイアン　(エコー)ジーザス・クライスト。この方が、わたしの心の中に住んでいるの。わたしはこの方とお話ができるのよ。

<後編>

(効果音)　(ドアの開く音)

光　ただいま。母さん、手紙来てない？

母　手紙？　どこから？

光　ダイアンからさ。

母　来てないよ。

光　おかしいなあ。もう来てもいいころなんだよな。

母　あの子ども、向こうへ帰ったら忙しいんじゃないの？

光　忙しいたってさ、僕、もう3通も書いてるんだぜ。一度くらい返事が来てもよさそうなのにな。

母　あきらめなさい。

光　いやあ、僕はあきらめないぞ。帰る前にあんなにはっきり約束したんだもん。そうだ、僕、大学に入ったら、オーストラリアに行っていいかなあ、母さん。

母　いい加減にしなさい。

ナレーション　1月に入ると、僕は本腰を入れて受験勉強と取り組んだ。僕を支えたのは、“大学に入ってオーストラリアのダイアンに会いに行く”という希望だった。しかし、大学受験勉強は、一体どこまでやればよいのか、雲をつかむようで、やればやるほど、こんなやり方でよいのか不安になっていった。

(効果音)　(ドアノック音。母が光の部屋に入ってくるドアを開ける音)

母　光、ずいぶんと遅くまでやっているんだね。

光　仕方ないだろ。頭が悪いんだからさ。

母　体に障らないように気をつけるんだよ。

光　分かったよ。早く寝なよ。

母　もう少ししたら、何か作って持ってくるからね。

光　いいよ、そんなことしなくたって。あまり構わないでよ。そうでなくても惨めなんだからさ。

ナレーション　それでも母は温かいうどんを持ってきて、そと僕のそばにおいて立ち去っていった。僕はその温かそうな湯気を見つめながら、昼間あんなに働いているのに、

僕のために起きていてくれる母のことを思い、胸が熱くなった。その時、僕はふと日ごろ読んでいた格言集の中の言葉を思い出し、開いてみた。「愛は多くの罪を覆う。」その下に小さく「聖書」と書いてあった。「愛は多くの罪を覆う。」こんなあいがあるのか。そう言えばダイアンも聖書を読んでいたっけ。ダイアンのようにになりたい。すると僕はどうしても聖書を読みたくなった。

そうこうしているうちに、いよいよ大学合格発表の日が来た。

光モノローグ
ナレーション

さて、僕のは...と。3531...、3531...、3531、あ、あったぞ！ うわー、合格だ！僕は、キリスト教主義ということもあったけれど、あのダイアンの行っているオーストラリアの学校の姉妹校ということで、立教大学を受験した。大学合格は、その意味でも二重の喜びだった。それに、大学に入れば、大威張りでダイアンに会いに行けるのだ。僕はウキウキしながら帰ってきた。

(効果音)

(家のドアを開ける音)

光

お母さん、ただいま。

母

光かい？ どうだった？

光

合格だよ、合格！

母

ほんと？ よかった。おめでとう。あ、光、手紙が来てるよ。

光

え？ だれから？

母

待ちに待ったダイアンよ。

光

やったあ！ どこ？

母

お前の机の上。

光

(自分の部屋で)あ、本当だ。待ってたんだよ、ダイアン。今日はなんてツイてる日なんだろう。

(効果音)

(手紙を開封して読み始める。)

光

「ミスター ヒカル。元気ですか？ そろそろ大学の入学試験の結果が分かるころでしょう。ヒカルはまじめだから、(ダイアンの声にオーバーラップ)きっとよい結果が出ると信じて、祈っています。さて、ヒカルから何度も手紙をもらって、返事を書かなかったこと、赦してください。実はわたしは、あなたのこと、忘れようと思っているのです。日本にいる時はとても楽しかった。ヒカルのことも好きでした。でも今は、よい思い出にしておきたいと思います。もう手書きを書きません。さようなら。ダイアン。」

なんて勝手なんだ。あれほど「好きだ」と言っておきながら。今になって「忘れようと思っている」なんて。愛なんて、そんなものなのか？ 人間の愛なんて、そんなに簡単に変わるものなのか？ それじゃ僕は、僕は、一体何を信じればいいんだよ！

ナレーション

僕は、喜びの頂点から、悲しみと不信のどん底に突き落とされてしまった。その時、あの格言集で読んだ聖書の言葉が心の底に響いてきた。「愛は多くの罪を

覆う。」(エコー)「愛は、多くの罪を覆う。」

(音楽) (大学の入学式。講堂に流れる賛美歌のオルガン)

司会者 (オフ)それでは、1984年度、入学式を行います。

ナレーション いよいよ大学の入学式。これからの新しい大学生活に希望を持ちながらも、僕の心の中は、どこかにポツカリと穴が空いたようだった。式が進んでいくうちに、僕は、また聖書から“愛”という言葉聞いた。

司会者 聖書を朗読します。コリント人への第一の手紙、13章。「たとい私が、人の異言やみ使いの言葉で話しても、あいがないなら、やかましいドラや、うるさいシンバルと同じです。また、たとい私が預言のたまものを持っており、...

光モノローグ (光の声にオーバーラップ)愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、...」これが愛か。こんな愛の心を人間は持てるのだろうか？ 僕はどうなんだ？ 人の愛について何か言う資格があるのだろうか？ ほかの人ではない、僕の内に愛が欠けているんじゃないか？

ナレーション 僕は、式が終わるとすぐ、大学の構内を歩き回った。頭の中には、さっき聞いた“愛”についての聖書の言葉が、圧倒的なきらめきを持って響いていた。

<大学構内>

伝道師 やあ、さっきはありがとう。

光 あ、いいえ。ちょうど通りかかったものですから。

ロシェル 何かあったんですか？

伝道師 いや、僕が聖書を配っている時、抱えていた聖書を落としそうになったんですよ。その時、この方が助けてくれたんです。確か、岸尾さんでしたよね？

ロシェル 岸尾さんですか。わたし、ロシェルです。よろしく。

伝道師 岸尾さん、ロシェルさん、食堂に行きたいんだそうです。一緒に連れて行ってあげていただけませんか？

光 はい。じゃ、行きましょう。

ロシェル ありがとう。あなたはクリスチャンですか？

光 いいえ。

ロシェル ちょうどいい。今、食堂でラドニーと会います。わたしもキャンパスクルセードという大学生伝道をしている団体のスタッフです。彼を紹介しましょう。

ナレーション 僕は、彼女が立教大の留学生だと思っていたので少しビックリしたが、でも、何かに引き付けられるような思いで、彼女の跡をついていった。

ラドニー やあ、ミスター岸尾、初めまして。僕はラドニーです。あなたは、イエス・キリストという方をご存じですか？ 彼は神の子です。その彼が、人の罪の代わりに十字架にかかって死に、その罪を赦してくださったのです。それほどまでに愛してくださっているのです。

光 愛…。こんな僕を愛して、命を捨ててくれる人がいるんですか？

ラドニー そうです。イエス様は、あなたの罪のために死んでくださったのです。あなたが、自分の罪を悔い改めて、イエス様を受け入れるなら、あなたの罪は赦され、イエス様があなたの心に住んでくださるのです。

光モノローグ ダイアンの言った“イエス・キリストが心の中に住む”というのは、そういうことだったのか。

ナレーション その時、僕は、イエス・キリストを信じたいと思った。しかし一方では、“こんな自分が本当に救われるのだろうか”と半ば疑ってモいた。その疑問は、数日後、ラドニーさんに勧められて出席したキャンパスクルセードの集会での、ロシエルの話聞いて解けた。

ロシエル わたしは、かつて、人に親切にするのが好きでした。でもそれは、ほかに人から受け入れてもらいたいからでした。わたしの友人に一人のクリスチャンがおりました。彼女はある時、こんな話をしてくれました。「神様の前では、どんな人間でも不完全で罪びとなのです。でも神様は、それをよくご存じの上で、人を愛し、そのまま受け入れてくれるのです。だから、“Jesus loves me. Just the way I do.” そう、彼女は、“イエス様がわたしを愛してくれる、まさにそのとおりにほかの人を愛します”と言ったのです。その時からわたしは、どんな人をも愛することができるようになりました。

光モノローグ そうか。僕は完全ではない。罪びとなのだ。それを認めなかったばかりに、今まで不安でイライラしていた。でも神様は、それを知っていて、このままで僕を受け入れてくれる。そうか。僕はイエス様を信じよう。イエス様に心の中に住んでもらおう。僕はもう独りぼっちじゃないんだ。

ナレーション その時、そう、確かにその時から、僕の心の中は変わったのだ。

<完>